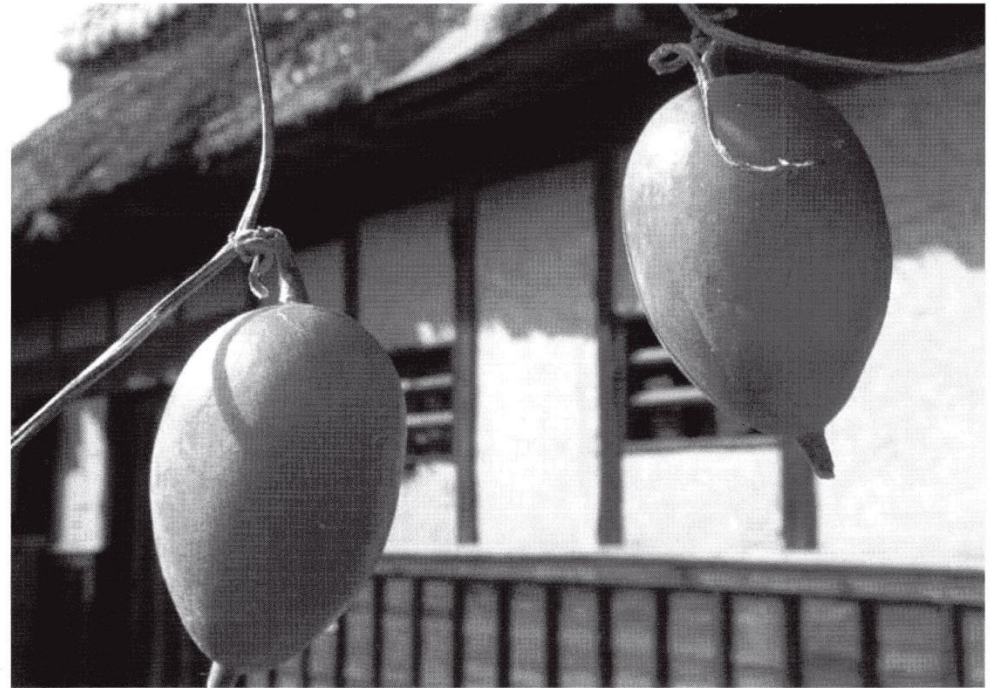


たまいたま 川柳



巻頭言

音読とくろく

願法みつる

「すぐれた人の書いた文章は、それを黙読翫味するばかりでなく、ときには心ゆくばかり声をあげて読んでみたい。われわれはあまりに黙読になれすぎた。文章を音読することは、愛なくてはかなわぬことだ。(島崎藤村) 愛なくては・・と言いつめられると、悩みの闇に落ち込みそうだ。この際、愛は別にして、単純に音読の有意性という観点で考えて見ると、日本文学は万葉の時代から、文字ではなく音声で表意されてきたのだから、成る程と肯ける。書籍の普及が表音による日本人の情感の交流を喪失させてきたとも言えそうだ。

机に向かい窓外の小さな宇宙を眺めながら、あるいは本を携えて戸外の大自然の中に身を置きながら、朗々と読書する・・そんな環境が在れば・・と想わずには居られない。ナニセ音読するにも箱物化した生活環境の中では、腹の底から声を出すこともない・・いや出来ない。小学校の教室で学んだ記憶以外には。

そして読書から敷衍すれば、川柳を読むこともまたその範疇で捉まえらる。その点、川柳の句会や大会での披露は、まさに声をあげて情感の籠もる文言の表出なのである。憚ることなく堂々と吟ずる機会であろう。その観点で句会や大会での選者披露を見渡すと、意外に声が出ていない。そう、矢張り愛がないのだろうか。

日日是好

願法みつる

十分に生きてたつもりの雲と水
生まれ死ぬ五臓六腑の皮袋
棺桶の広さは高が知れたもの
骨壺の重さに貴賤あるでなし
実力の脳味噌なんて数グラム
目力と気力で生きて古代人
聖人の足跡にある正と反
人という字が仰向けによく転ぶ
足裏の模様も少し様になり

平成28年

10月号 (No.683)

日川協加盟